

第一話

サマリヤの女

「わたしに水を飲ませてください」

(ヨハネの福音書四章七節)

◆空っぽの水がめ

その日も早朝から火だるまのような太陽がじりじりと地を焦がしていました。空にはひとひらの雲すら見あたりません。ひとそよぎの微風の気配さえありません。

「水はどうした、一滴もないぞ。なにしてるんだ」

男の濁った怒声が容赦なく女の胸にぶつけられました。声の主は女と暮らしている男、夫と呼べばいいのでしょうか、からです。

「じきに汲んで来ますから…」

女は語尾を細めてつぶやくように言いました。

「ふん、じきにな、いつだってそう言うだけなんだ。空っぽのかめなんか見たくもない」

男は女をのしるだけでは収まらないのか、水がめを蹴り倒しました。空のかめは悲鳴にも似た高い音を立てて、女の前まで二回、三回と転がりました。

これ以上あと一言でも言ったら、このままではすまない。

女は何度もくり返されてきた苦い経験を、いや、手痛い目にあってきたことを反射的に思い出し、逃げるように外へ出ました。

二人しかいないのに、たった二人で暮らしているのに、二人でいることができないのです。女は身の置き所がないのです。

さすがに男もそれ以上のことをするわけではありませんでした。水がないこと、どんなにわめいても今すぐには汲みに行けないことをよく知っていました。毎度のことなのです。

それつきり家の中からは何の物音も聞こえなくなりました。

女はうるんだ瞳で空を見上げました。いつものことなのに、慣れっこになってもいいはずなのに、涙が込み上げてきて胸が痛いのです。だれが見てくれるでもない涙、わかってくれるでもない涙をせめて空に流したいと思うのです。でも今日の空はあまりに清く澄みきっていて近寄りがない厳しさを感じます。女は空にも拒絶されてしまったような疎外感におそわれるのでした。

「空は美し過ぎる。私の辛さなどわかつてはくれないでしょう」

女はそうつぶやくと崩れるように膝をつき、背を丸めてかみ込みました。頭上の空はいっそう高くなり、孤独の渦の底に引き込まれるようなめまいを感じました。

そのまま女は土の上に座り続けました。こんな時はじっとしているしかないと知っていました。男が起こした荒々しい風も心の動揺も、時の経過と言う無言の味方が鎮めてくれる。

これが女のただひとつの保身策でした。

その通りに、しばらくすると涙が乾いて、胸の痛みも薄らいでいきました。たしかに時が味方してくれました。女は気を取り直して伏せていた顔を上げ、過ぎ行く時の足音を確かめました。時おり上を仰いで、悠然と行く太陽の進路に視線を馳せました。時を計っていたのです。やがてそばの庭木の葉がかすかに揺れたのを見て取ると、風が変わって待っていた時が来たのを察しました。

「ようやく水汲みに行けるわ。さあ、急がなくては」
昼近くになっていました。

◆水汲みに

水を汲むという、時代がかった言葉が早々からなんども出てきましたが、ご想像の通りこの物語の時代はたいそうな昔になります。そう、歴史の階段を過去へ過去へと二千年もくだった、パレスチナはユダヤの国での出来事です。正確には北部に位置するサマリヤ地方と言い添えましょう。パレスチナ、かつてはユダヤ民族が繁栄と栄華を誇った一大国家を築いたこの地は、この時、ローマ帝国の属州のひとつになり下がり、帝国から派遣された総督による屈辱に満ち

た政治が行われていました。

この物語のヒロインは平均的な社会生活をしている、別の表現をすると、隣り近所の人々と隔てなく親しい関係を持って暮らしている人とは言えません。いつも人目を気にしながら、人目に隠れて、人気がない村はずれに、人前には紹介できないような男と、人目を避けて暮らしているからです。差別視されても仕方のないような女性でした。

だから、水がないのです。朝から、たかが水のことです。いさかいをし、涙を流さなければならぬのです。

パレスチナでは水は命です。集落にはたいい井戸がひとつあるだけです。もともとは逆で、井戸のあるところに人が集まって暮らすようになったのです。井戸は村の生命線です。もう少し南の地方ではもっと深刻です。井戸だからと言って無制限に汲むわけにはいきません。村人たちはある一定の時間にいつせいに集まってきて水を汲み、水を使用し、その後はきっちりふたをして、男が数人寄らなければ動かさないような大石を乗せて井戸を守るのです。井戸を守るにはすなわち自分たちの命を守るのと同じなのです。

たいい、水汲みは女たちの仕事で、それも早朝、大地が太陽の炎熱攻撃を受けない前のひ

とときに、大急ぎでなされました。女たちは順番を争うように列をなし、この時ばかりは二の腕もあらわに水を汲むのです。当然のように朝のあいさつから始まってコミュニケーションが始まります。会話の泉が吹き上がり吹きこぼれます。夫のこと、老いた父母のこと、子どもたちのこと、病人や自分の体調のことなどひとしきり話し終ると、少し声をひそめて、耳元に口を寄せて、あまり聞かれたくないこと、でも話さずにはいられないこと、そうです、興味本位のうわさ話や陰口が始まります。他意はないのです。ちよつとした憂さ晴らしです。それが正常な家庭婦人たちのお決まりの早朝定例日課というわけです。

そこへ、正常でないヒロインがどうして近づけるでしょうか。うわさの主が姿を見せる場面ではありません。いっせいに向けられる視線の矢は女の心臓を真ん中から射抜くことになるでしょう。耐えられるものではありません。

そこで、女は真昼に出かけることにしたのです。

サマリヤの真昼は真夜中と同じに外出する時ではありません。人の視線の矢ならぬ太陽の刃に耐えねばならないのですから。

水汲みは重労働です。女の住みかは村外れ、井戸は村の中心にあります。そこまで行かねばなりません。

村人たちはいかがわしい女が昼日中にそっと水汲みに来るのを知っていました。しかし妨害はしません。そこまで非情ではありません。水が人だけでなく生まれたての家畜の子に至るまで、およそ命あるものにはどんなに必要か知っているからです。

女はおもむろに立ち上がるとそっと家に入り、水汲み用のかめを肩にして村の中心に向かう一本道を歩み出しました。

「井戸へ行ってきますからね。じき戻ります」
声を残して、です。でも、何の応答もありませんでした。いつものことでした。

♣ 旅の人

水汲みはきつい仕事ですが、女は、嫌いではありませんでした。家を背にして人けのない道を歩いていると、新しい世界に向かっていくような気がして、ほっとするのです。きつく縛られている縄目から解かれたように、全身が軽くなるのです。顔を上げて胸を反らし大きく息を吸い込みます。さっきまでの自分とちがう自分になったようなほのかなうれしさが生まれてきます。それを味わうのが喜びなのです。

ふと、このままどこまでも行ってしまいたい、知らない世界へ行ってしまいたい、自分の過

去を知る人のいない世界へ行つてみたいと、激した思いにかられることもあります。実際には水の入ったかめを肩に食い込ませながら、来た道をたどることになるのですが、一時の自由が例えようもなく大切に思えるのです。今風に言うならば唯一のストレス解消法というところでしょうか。

「おや、人のようだわ。でも、そんなはずはない、おかしいわ」

だれもいないはずの井戸のかたわらに人影が見えるではありませんか。ドキッと胸が鳴り、胸が騒いで、足もとが揺れるほどです。

困るのです、人がいては。計算外のことです。

一瞬、引き返してしまおうかとの思いが走りました。村人と会いたくないばかりにじつと時を待っていたのです。身を焦がすほどの炎暑に耐えてここまで来たのです。人と顔を合わせることを考えると身の縮む思いがします。恐ろしいのです。

でもいまさら引き返せるものではありません。水がどうしても必要でした。水無しでは今日の一日を生きてはいけません。空のかめを見たらそれこそ男は怒り狂うでしょう。これ以上みじめな思いはたくさんです。

ためらいはありましたが、女は井戸へと近づいていきました。

人影は村の人ではなく旅姿の男性でした。一休みしているようです。水が欲しいのかもしれない。

「それにしても、どうしてこんなところを通るのだろう、ユダヤ人の通る道ではないのに」
不審でした。

ユダヤ人がサマリヤを通過するのは異例のことです。両者の間には激しい反目があり、お互いに敵視し合っているからです。ユダヤ人はサマリヤ人を極度に蔑視し、汚物を避けるように決して近づこうとはしません。北方のガリラヤに行く時も、サマリヤを通過するのが最短距離であるのに、わざわざヨルダン川を渡って東側を通るのでした。

深いわけがありました。歴史の悲劇がありました。

アッシリヤ帝国が隆盛を誇っていたころ、彼らはバレスチナに戦いを挑み、当時、北イスラエルの首都であったサマリヤを占領、多くの住民を捕囚として連れ去りました。一方で、各地の被征服民族を入植させ、他民族との混血政策をとりました。その結果サマリヤのユダヤ人は移住民と雑婚、宗教や習慣も混交してしまいました。唯一神を固く信奉し、民族の血の純粹性を重んじるユダヤ人は、かつての同胞の醜態がどうしても許せないのでした。そんなわけでサマリヤを通過するくらいなら、多少の犠牲を払っても遠回りを厭いませんでした。

それなのに、なぜこの方はサマリヤを通過するのだろうか。

よほど深いわけがあるにちがいない。

女は自分の境遇を忘れて、旅人の行動を推理し始めました。好奇心が生まれたのです。好奇心とは本来、生活や精神の余裕が生み出す贅沢な遊び心です。地をほう虫のように生きてきた女は、自分に係りのない人や物に興味を示すことはほとんどありませんでした。

それが、井戸のかたわらに座す旅人に心が動いたのです。人影が恐れていた村人でなく、また何かと口うるさい女性でなかったせいもありますが、萎縮した心がわずかに緩んで、忘れ果てていた好奇心がひょいと顔をのぞかせました。

この方は私のうわさなどぜんぜん知らないのだ。

そう思うと肩に食い込んでいた力が抜けて、真正面から向かい合って話ができそうな気がしてきました。

が、そうは言っても緊張と警戒心が体をこわばらせてきます。女はおそろおそろ近寄っていききました。

私の方からあいさつした方がいいのかしら。でも、何と言えはいいの。男の方に声をかけるなんて卑しい女だと思われるかもしれない。もつとも私は卑しい女に過ぎないけれど。

この方の素姓が気になるわ。たった一人でサマリヤを通るのはよほどのいわくがあるにちがいない。もしかして追われているかもしれないし、反対にたいへん危険な人物かも知れないわ。

女は思いが散乱してまとまらないまま、伏し目がちに旅人を窺いました。そつと人物鑑定を試みかけたのです。でも、そうたやすく人が見抜けるでしょうか。まして女にはそんな眼力はありませんでした。それだけの器量があつたら、今ごろ人目を忍んで水を汲むようなおぼろまな生き方をしているはずはないのですから。

わからないわ私には、愚かな女ですもの。

女の口の端に自嘲めいた寂しい笑みが浮かびました。そのまま女は視線から力を抜いて、旅人の横顔を見ました。

おや、ほほと肩のあたりに深い疲れが見えるわ。よほど急ぎの旅をして来られたようだ。目を閉じているようだけど、休んでいる風でもないわ。人を待っているのかもしれない。

悪い人には思えない、いいえ、悪い人どころか、なんだか気高い方に思える。もつとも私は今までにそんな方にじかにお目にかかったことはないけれど、きつと、この方のような人を高潔な方って言うのではないかしら。

女のうちには次から次へとうねりをなして旅人への想像が押しよせてくるのです。過敏なほ

ど人間恐怖に取りつかれていたはずなのに、見知らぬ一介の旅人にこれほど惹きつけられるとはどういうことでしょう。女の内部に新しい何かが起こり始めているようです。たんなる好奇心ではなさそうです。

旅人自身がかもしだす雰囲気のせいかもしれません。

♣ 声をかけられて

「わたしに水を飲ませていただけませんか」

ふいに、女の耳に思いがけない一言が流れてきました。飛び込んできたと表現するにはあまりに落ち着いた静かな声でした。女がほどよい距離に近づくのを待っていたかのようにでした。

旅人は、そうです、旅人と一般名詞を使うのはもうこれでおしまいにしましょう、イエスはそう言ったのです

「!…」

えっ、何ですって、私に、私にですか。

女はすっかり驚いてしまいました。危うく水がめを落としそうになるほどに。

聞きがちではないかしら。

「わたしに水を飲ませていただけませんか」

女は耳の底に残るイエスの声を大急ぎで反復してみました。

ああ、なんと快い響きでしょう。全身に刻みつけたいほどです。かつてだれがこんなにていねいに、こんなに優しく、こんなに穏やかに語りかけてくれたでしょうか。

イエスは女の方に体の向きをずらし顔を向けて語りかけました。凝視するでもなく、外すでもない、しなやかな視線の使い方にイエスの細やかな心配りが偲べれます。もしもまじまじと見つめられたら、おそらく女は恐ろしさと恥ずかしさで後ずさりしたでしょう。かと言って背を向けたまま言われたら、屈辱を感じて腹立たしく悲しくなつたでしょう。

「わたしに水を飲ませていただけませんか」

女はもう一度、忘れられない一言をこだまさせるのでした。

この方は私をさげすんではない。

私を私として見ておられる。

女はとっさにそう理解したのです。

一方で、なぜユダヤ人が日ごろから忌み嫌っているサマリヤ人に話しかけてきたのかいよいよ不思議でなりません。イエスを見かけた時から抱いた疑問でした。

「あなたはユダヤ人とお見受けしますが、どうしてサマリヤの、しかも女の私なんぞに水を求めになるのですか」

女はイエスにそう質問しながら自分の大胆さに驚きました。見知らぬ旅人に、それも自分たちを軽蔑しているユダヤ人に恐れもなく話しかけているのですから。いつもの自分とは思えません。しかしそんな自分がとても誇らしく好ましくさえ思えるのです。

ぶしつけな質問だけれど、どう答えてくださるのだろう。きっともつと豊かなもつとうれしいおことばが聞けるにちがいない。

そうだわ。私もあなたの望みをかなえてあげましょう。お望みの水をいくらでも汲んで差しあげましょう。心ゆくまでお飲みください。水入れをお持ちならそれにもたっぷり汲みましょう。もしお許しくださるなら、汗とほこりにまみれたみ足を洗っても差しあげましょう。なんども水をお汲みいたしましょう。

女の頭脳はいつになくスピーディーに回転し始めました。感情まで刺激されて、胸がさかんにときめくのです。

イエスは笑みを含んだ明るいまなざしを向けて、ゆっくりと、言い含めるように話し出しました。

「あなたは神様が与えようとしている恵みを知っていますか。あなたに水を飲ませてくれと言っているわたしがだれだかわかりますか。真実を知ったらあなたの方から水を飲ませてくださいと言うにちがいありませんよ。わたしはあなたにいのちの水をあげましょう」

えっ…。

異国の言語を聞いているようでした。こんどのことばは耳にとどまりません。流れて消えてしまうのです。女は一言でもいいから心にとどめ、理解したいと意識を集中させました。

あなたのほうで水を飲ませてほしいと言われたものではありませんか。水を欲しがっているのはあなたでしょう。なぜ私があなたに水を求めるのですか。わたしは今、水を汲みに来たところです。自分の水は自分で汲めるのです。あなたより上手に汲めると思う。

いのちの水ですって、そうよ、この水はいのちの水よ。この水でみんなが生きている。冷たくておいしいわ。地の深い底からわき出る恵みの水よ。

でも、どうしてこんなことを言うのだろう。

いったいこの方はどなたなの。

♣水がほしい

「先生」

思わず女はそう呼びかけていました。

女の心に、イエスへの尊敬の思いが生まれていました。親しみでもした。祭司かレビ人も知れないとも考えました。

「あなたは水を汲むものを持ってはおられません。どこからその生ける水を手に入れるのですか。先生、この井戸は深いのです」

女は終わりの一句に思いを込めた。

この井戸は深いのです。

そうなのです、この井戸は深いのです。とつても深くてたいへんなのです。

女は我に返ったように、抱えたままの大きな水がめに視線を向けました。

そうだわ、私は水汲みに来たのだった。今からこの深い井戸の底から水を汲み上げなければならない。これからも毎日毎日一日も欠かさずに続けなければならない。来る日も来る日もしなければならないのよ。力を入れて、力の限り汲まなければならない。もうたくさんだわ。汲み

たくないわ。他に簡単な井戸があるならそこへ行きたいものだわ。

「先生、この井戸は深いのです。とつても深いのです。あなたはその生ける水をどこから手に入れるのですか」

女の声が入りました。その声に引かれるように女はすばやく二、三步イエスに近づきました。

「あなたはご立派な方とお見受けしますが、私たちの先祖ヤコブより偉いお方なのですか」

女は記憶の片すみにある遠い昔の祖先の名を口にしました。ヤコブは確かにこのあたりに土地を買った史実があり、この井戸はヤコブやその子たちが使ったと言ひ伝えられているのですが、ヤコブはサマリヤ人だけの祖先ではありません。むしろ民族の血の純粹性を命がけて守ってきたユダヤ人こそが正面きって主張できる祖先名なのです。混血の民サマリヤ人が「私たちの祖先ヤコブ」などと声高に言える根拠はありません。聞く相手によっては一騒動起きてても思議ではない物騒な発言でした。

でも、女は言ってみたかったです。何も誇れるものなどない卑しい境遇にいるけれど、せめて祖先の名くらいは胸を張って言いたかったです。私の祖先はアブラハムの子イサクの子ヤコブだと。おそらくイエスなら静かな笑みを絶やさずにうなずいてくれる、そんな気がした

のです。

叱られたらそれもいい、激怒されたら、それでもいい。

いいえ、このお方は決して声を荒げたりしないでしよう。

女が思ったとおり、イエスから静かで透き通った声が始まりました。女は一言も聞きもらすまいと身を乗り出すのでした。心が高まって狂おしいほどです。

「この水を飲む者はだれでも、すぐにまた渴きます。しかしわたしが与える水を飲む者は決して渴くことはありません。それどころか、わたしが与える水は、その人の内で泉になるのです。その泉から永遠のいのちの水がわき出てくるのです」

イエスの声は快い旋律のようでした。どこかで聞いたことのある調べのようでした。幼いき母の胸の中で聞いたような気がしました。いや、もつと、もつと、前でした、魂のふるさつで聞いたのでした。なつかしくて、せつなくて、胸が張り裂けそうでした。

欲しい、その水が！

ふいにまっすぐに伸びた一本の木のようないや強い意志が生まれました。女はもうわかったのです。イエスの言う水が単なる生活水でないことを。井戸の水ではないことを。

この方がくださる水を飲んだら私が変わるのだ。私の人生が変わるのだ。負け犬のような生

活から逃げ出せるかも知れない、昼日中に水を汲みに来なくてもすむかも知れない。

そうよ、もうたくさんよ、こんな生活は。もうごめんだわ。

欲しい、その水が、その水が。

「主よ、私が渴くことがなく、一度とふたびここに来なくてもいいように、その水をください」
女は抱きかかえていた水がめを勢いよくイエスの前に差し出しました。子どもが母親にねだるように。

♣ 魂の手術

「すぐあなたの夫をここに呼んできなさい」

「?!…」

先ほどまでのイエスの声ではありませんでした。静かでしたが、槍の穂先のように真一文字に女の胸を突き刺しました。女は音にならない叫び声をあげました。

夫ですって、夫、夫。

夫を呼んで来なさいですって。

女の脳裏には今し方水を汲んで来いとわめていた男の顔が横切りました。

ちがう、ちがう、夫ではない。このお方の前に紹介できるような人ではない。あの人は、私の夫なんかではない。

男と暮らすようになった数年前のいきさつがよみがえってきました。と、恥ずかしさで全身が燃えるようです。

思わずたじろいで、

「わたしには夫はありません」

そう、言つてしまいました。

「そのとおりです、そう言うのはもつともです」

イエスはよく承知していると言うようにうなずくのです。

「?…」

「あなたには以前は五人の夫がありましたが、今いっしょにいるのもあなたの夫ではないから、夫はいないと言うあなたの答はまことに正しい。あなたはほんとうのことを言ったのです」

「!…」

女はいよいよ動転しました。震えが襲つてきて目の前が大きく揺れ、意識が遠のいていきます。

ああ、この方はどなたなの。私のすべてを知っているとは。

以前に五人の夫がいた、今のはほんとうの夫ではない…。

そのとおりだわ、事実だわ、私はずっと幾人もの男たちと暮らしてきた。不潔な暮らしをしてきた、そして今も…。

ああ、私は罪の中に生きてきた、罪にまみれている、汚れはてている。汚い、汚い、私は汚いの。もういや、たくさんよ。

女の両眼からほうほうと涙が流れ落ちました。

私だって清くなりたいのよ。どうしたらいいの、どうすれば清くなれるの。だけれが、だれかが助けてくれなければ、わたしにはどうしようもできない、ああ…。

ふと、女は心中の叫びが聞かれているような気配を感じました。音のない声を、イエスの耳が、イエスの心が、イエスの視線が、イエスの全身が、じっと聞いているようでした。

この方は私を受けとめておられる、分かってくださっている、あわれんでくださっている。汚れているのに、罪だらけなのに。

女は肩の上にイエスの手がそっと置かれたような感触を受けました。手の温かさが体のすみずみまで沁みわたっていくのです。一度も体験したことのない生きた力、いのちのようでした。

私をゆるしてください、神様。ゆるしてください、神様…。

女は呼んだことのない神に語りかけていました。イエスがそばにおられる。そう思うだけで恐れが消え、体の芯から新しい力のようなものがつき上げてくるのです。

そうよ、夫なんかいない！

初めからいなかったのよ、だれも、だれも、夫ではなかった。

そう、叫んだ時でした。村はずれの家も、男も、水汲みの悲しさまでもがすうっと消えて、かわりに広々とした薄緑の平原が見えてきました。光が揺れ、穏やかな風が吹き抜けていくのです。

女は肌触りの悪い厚い上着を脱いだ時のような軽やかな気持ちになりました。今まで心を十重二十重に締めつけていた鎖が解け、自由と解放に満ちた別室に移されたことを知るのでした。新しい私がいる。今の私はさつきまでの私ではない。生まれ変わった。生まれ変わったのだ。そう思えるのでした。

♣ 新しい生へ

このお方はいったいどれ？

昔の預言者のようなお方かしら。神様の力を持った特別な人だと思う。

「先生、あなたは預言者でしょうか。私たちの祖先はこの山で礼拝しました。でもあなたがたユダヤ人は礼拝の場所はエルサレムだと言います。いったいどちらが正しいのでしょうか」

女の瞳に灯がともし、澄んだ光がこぼれていました。口調には力がこもっています。

「いいですか、私の言うことをよく聞き分け、信じなさい。この山でもなく、エルサレムでもないとここで神を礼拝する時がやってきましたよ。霊と誠で礼拝をする時が来るのです。もう来ています。神はそのような礼拝者を求めています。いいですか、神は霊なのですから礼拝する者たちも霊と誠を持つてすればいいのです。場所ではないのです。形ではないのです。心が大切なのです、信仰がなくてはなりません」

イエスは女の心が新しくなり、真理を受け入れるだけのゆとりができたのを待っていたかのように、新しい神の国について話し始めました。

女はひたとイエスを見つめました。強い意志でみつめました。イエスのそばにいますとずっと昔にひそかに思い描いたことのあるあこがれの世界、理想郷にいるような安堵感を覚えるのでした。

このお方は、どなた、だろう。

もしかしたらこのお方はメシヤかも知れない。救い主かも知れない。

「私はキリストと呼ばれるメシヤが来られることを知っていますが、あなたは、あなたは、もしや…」

女はためらいながらも、語尾に力を込めました。

「そうです、わたしがそうです」

イエスは即座に言い切りました。あつけないほど明快に。

「ああ…」

女のくちびるは抑えようもない感動の吐息で小さく震えていました。感動をことばに乗せる余裕はありませんでした。いいえ、ことばなどいらなかったのです。

女はイエスが光に変わったような気がしました。その光が波紋のように広がり、輪の中に流れ込んでいくのを感じました。

「主よ、信じます。あなたこそメシヤ。あなたは私のすべての罪を洗い清め、赦し、新しいのち、決して渴かない永遠のいのちの水をくださったのですね」

女の両眼からはまた新しい涙があふれ流れました。静かな温かい涙でした。こらえる必要がありませんでした。苦しみの涙でもみじめな涙でもありません。女は、人間とはうれしい時にも泣けるのだと初めて知るのでした。胸を開いて、顔を空に向けて、ああ、手放しで泣けると

は、何と快いことでしょう。

イエスはそれつきり何も言いませんでした。

しかし、女は笑顔に光るイエスの目にも涙を見たような気がしました。なぜって、女は考えるのです。このお方は私が苦しむ時、いっしょに苦しんでくださり、私が喜ぶ時、いっしょに喜んでくださるに違いないから。私が泣く時、きつと泣いておられる。

「先生、おそくなりました」

「ようやく、昼の糧を求めてまいりました」

「さあ、さあ、いただきますしうや」

数人の男たちが少々荒い足取りと息づかいで近づいてきました。一様に屈託のない笑顔がイエスに向けられました。

「おや、この人は」

仲間の一人が女をみて不思議そうに言いました。

女ははっとして二、三步後ずさりしました。

が、すぐに気を取り直し、イエスの視線が自分に向けられたのを確認すると黙礼して小走り

に駆けて行きました。

「あつ、水がめを忘れてるぞ」

「おーい。そこのご婦人、忘れ……」

女のいた場所に、水がめが空のまま置かれていました。

「いいのです、もう水はいらないのですから」

イエスは楽しそうに言いました。

女は村の家々の立ち並ぶ通りを足早に走ります。

おや、道がちがいますよ。あなたの家は反対方向ですよ。村はずれの家に帰るはずでしょう。どこへ行くこうとしているのですか。

いいえ、女は承知でそうしているのです。女を占領しているのはただひとつの思いです。家に帰る前にどうしてもしたいことがあるのです。言いたいことがあるのです。村中の人々に。

私はメシヤに会った、メシヤがすぐそこに来ておられる、と。

あの方は私の過去をすべて言い当てました。確かにメシヤです。皆さんもすぐおいでになつてお会いください、と。

第1話 サマリヤの女

女はふたたびイエスに思いを注ぎました。

あの方はユダヤの人々が卑しんでいるサマリヤに來られた。私を見ても輕蔑も差別もなさらなかつた。サマリヤを受け入れてくださった。サマリヤの私にこだわりなく声をかけられた。ああ、今も聞こえる「わたしに水を飲ませてください」というお声が。

あの一言がなかつたら、私は水がめには水を汲んだとしても、渴いた心でもとの生活に戻つていよう。

いまはちがう、心に水があふれている。あの方が言われたようにいのちの水がわき出ている。あの方ももしかしたら、私が昼に井戸に居ることを知つておられて、私にお声をかけるために、わざわざサマリヤを通られたのかもしれない。

女はその思いにつき当たつて、はつとしました。

そうだ、あのお方は、私に会うために來られた。私にいのちの水を与えるために來られたのだ。あの方は私が毎日毎日、井戸へ行くのを見ておられた。ほろほろの私を見ておられた。罪だらけの生活に沈んでいるのを見ておられた。滅ぶほかはない私を見ておられた。だれからも相手にされず、だれにも愛されたことのない私を見ておられた。

あの方は私を知つておられた。私を救うために來られた。サマリヤまで來られた。あえてサ

マリヤを通られた。私を救うために。

女はまたイエスに思いを傾けました。

と、すぐそばにイエスがおられるような気配を感じました。

ありがとうございます……。

小さく言ってみて、この一言もずいぶん使わなかったと気がつきました。使うゆとりがなく置き去りにしていた言葉でした。

ありがとうございます。

口の中には熟したぶどうの一粒を含んだような快い甘さが漂ってくるのです。

女は一步一步に力を入れて先へ先へと急ぎました。

おわり